

初見視唱のスキルを支える認知機能の研究

平野 直子

序論

初見演奏の技能は、音楽の演奏を楽しむために必要な技能である。しかし、その習得プロセスは明らかになっていない。また、これまでに歌の初見演奏である初見視唱に関する研究は十分に行われていない。そこで、本論文では初見視唱の知覚処理を明らかにし、初見視唱技能を向上させるための練習方法を提案することを目的とした。

実験 1

目的:合唱経験の有無により、保有する音楽パターンの量に差があることを示すこと。

結果:合唱経験者は合唱未経験者よりも、一回の注視範囲が広く、時間が長かった。

結論:合唱経験者は一度の注視でより多くの楽譜の視覚情報を読み込んだといえる。一度に多くの楽譜の情報を読み込むために音楽パターンを用いて楽譜を読んでいたと考えられる。このことから、合唱経験者は合唱未経験者よりも音楽パターンを多く保有しているといえる。

実験 2

目的:初見視唱技能によって、音感や音楽経験、初見視唱時の眼球運動に差があることを示し、その差がなぜ生じるのかを明らかにすること。

結果:初見視唱課題成績の上位群は、音感テストの成績が良く、調に関する知識があり、実験 1 で合唱経験者にみられた眼球運動を行っていた。特に、音感テストの機能的和声感と受動的絶対音感の成績は、初見視唱課題成績の上位群の成績が優位に高かった。

結論:初見視唱が得意な人は、音感の中でも機能的和声感、受動的絶対音感があること、楽典の知識があること、音楽パターンを用いて楽譜を知覚していることが示された。

総合論議

実験 1 と実験 2 の結果から、初見視唱時の知覚処理をモデル化した。この知覚処理のモデルを用いることで、様々な初見視唱の演奏中に起きたエラーの原因を特定することができた。また、初見視唱技能を向上させるためには、出したい音高を歌うための能動的絶対音感を身に付けた上で、機能的和声感や受動的絶対音感を習得することが重要であると考えられる。能動的絶対音感は一時的な歌の練習により身に付くため、機能的和声感や受動的絶対音感を身に付けるために、様々な調のカデンツやスケールを聴いて覚えることが望ましい。(応用認知心理学)